医科新聞１１月号

医療法人社団　慶育会
グレースホームケアクリニック横浜
神奈川県横浜市緑区長津田 2258-2

インフルエンザについて

＜インフルエンザとは＞

インフルエンザは、38 度以上の発熱、寒気、全身の痛み、だるさなどの症状が現れる病気です。

インフルエンザウイルスへの感染を原因に発症し、インフルエンザウイルスにはＡ型、Ｂ型、Ｃ型の 3 種類があり、冬に流行する季節性インフルエンザはＡ型とＢ型です。

また、インフルエンザは、子どもや妊婦、高齢者などは重症化しやすいと言われています。

流行前にワクチンを接種することによって発症率を下げ、重症化を予防することができます。

＜今年の流行＞

2023 年は例年冬に流行するインフルエンザが 9 月に入り急拡大しており、14 都県で流行が注意報レベルを超え、学級閉鎖などの施設数は 2204 に上り、今シーズンは新型コロナウイルス前より大規模になる恐れがあります。これは、水際対策が 4 月末で終了し、人の往来が活発になったことが流行の要因の 1 つで、9 月以降の感染者急増は、夏休みが終わり、学校が再開したことが大きいとみられます。

また、新型コロナウイルスの感染拡大が 2020 年 1 月に始まり、感染対策の成果でインフルエンザは昨年末まで流行しなかったため、多くの人がインフルエンザに対する免疫が低下し感染しやすくなっています。

今シーズンは例年より大規模の流行となるでしょう。

＜感染対策＞

感染対策として外出から戻った時の手洗いといった基本的な対策が効果的です。

ワクチン接種も有効とされ、日本ワクチン学会は接種を強く推奨する見解を公表しています。インフルエンザワクチンは不活化ワクチンのため、免疫のない患者に接種しても感染を起こす心配はなく、高齢者、基礎疾患を有する患者、医療従事者などはワクチン接種をすることが推奨されています。

また、手洗い、手指消毒やマスク着用といった予防策の重要性も訴えています。

マスクの着用、手洗いの励行によりウイルスの体内への接触や侵入を減らし、他の人に感染を拡大させないために、感染者は発症してから 5 日間、解熱が得られてから 2 日間は自宅で安静加療することが望ましいです。

＜潜伏期間と感染経路＞

潜伏期は 1 日前後と極端に短く、発症後約 5 日間は感染力があるため、家庭内や学校、職場で一気に流行します。

主に痰からうつる飛沫感染で、家庭内では 20%から４０％の人にうつります。

感染した人が咳やくしゃみで空中に吐き出した分泌物に混じったウイルスが、他の人に接触して口や鼻から侵入する事によって感染します。

＜診断＞

流行状況、患者との接触歴の確認、典型的な臨床症状が診断の第一歩となります。

インフルエンザ迅速診断キットにより短時間で簡便に診断でき、A 型と B 型の鑑別も可能です。

＜治療＞

自宅での安静加療を原則とします。水分補給や食事摂取ができない時などは、点滴による補液が必要となります。

インフルエンザ治療薬として、タミフル,リレンザ,ラピアクタ,イナビル,ゾフルーザがあります。

抗インフルエンザウイルス薬の服用を発症から 48 時間以内に開始すると、1 日、2 日発熱期間が短縮され、鼻やのどからのウイルス排出量も減少しますが、症状が出てから 48 時間以降に服用を開始した場合、十分な効果は期待できません。

ゾフルーザは、薬剤耐性の為、日本感染症学会と小児科学会が、12 歳未満の小児、免疫不全患者や重症患者では、積極的な投与は推奨しないといった提言を出しています。

＜予後＞

発症早期に抗インフルエンザ薬を投与すれば、予後は比較的良好です。

文責　　医師　振津　知哲